

## 追悼：加藤 進先生を偲んで

加藤 進先生は2020年1月18日にご逝去されました。1928年8月生れで享年91歳でした。加藤先生は超高層物理学ならびに中層大気科学に関する先端的な理論研究を行われるとともに、MUレーダー（中層・超高層大気レーダー）をはじめとする観測的研究を先導されました。

加藤先生は旧制浦和高校から京都大学理学部に進学され、1960年に理学博士号を取得されました。1955年に京都大学工学部に奉職、1967年に教授に昇任、そしてMUレーダーの建設開始に際して1981年に創設された超高層電波研究センターのセンター長として計画を主導されました。この間にオーストラリアのCSIRO、米国のNCAR、UCLAに留学されています。

京都大学工学研究科において多くの学生を指導されたのに加え、1992年に京都大学を停年退官された後も、1994年から1997年に毎年約4ヶ月間インドネシアのバンドン工科大学客員教授として学生教育を続けられました。また、1992年から1996年に日本インドネシア科学技術フォーラム副議長として国際交流に尽力されました。

1979年から1980年にSGEPSS（地球電磁気・地球惑星圏学会）会長を務められ、国際的には1991年から1995年にICSU（当時の国際科学会議。現在は国際学術会議（ISC）に改組）傘下のSCOSTEP（太陽地球系物理学科学委員会）の副会長として学界の振興に尽力されました。特に、1982年から1995年に実施されたMAP（中層大気国際協同観測計画）では国際的にも中心的役割を果たされ、大気重力波による平均流加速、オゾンホールをはじめ喫緊の科学テーマの解明に向けた研究を振興されました。

加藤先生は1960年代に、1日及び半日周期の大気潮汐波の構造を決定するラプラス方程式を世界に先んじて正確に解き、特に潮汐波の鉛直伝搬について19世紀以来の論争に明快な結論を示されました。これにより地表付近と電離層での大気潮汐の観測結果を統一的に解釈し、大気層上下結合過程の研究に先鞭をつけられました。

加藤先生は観測による実証にも研究域を広げられ、1970年代には独自開発の流星レーダーによる大気潮汐



等の観測、同時に海外の大型大気レーダーによる大気波動の観測を実行されました。1984年に世界最新鋭のMUレーダーを建設され、対流圏から電離圏に至る広い領域における先駆的な観測研究を実現されました。1980年代当時には未知圏と称されていた中層大気の力学過程を解明するなど、大気科学の様々な課題に新しい展望を与えられました。最先端のレーダー技術は、気象庁等で実用化されたウィンドプロファイラの開発につながりました。

これら長年にわたる先生のご功績は様々な学協会からも評価され、1987年英国王立協会アップルトン賞、SGEPSS長谷川・永田賞、1989年日本気象学会藤原賞、日本学士院賞を受賞され、1991年AGUフェロー、1995年米国工学アカデミー外国人会員、2016年JpGUフェローに選ばれています。また2000年には勲二等瑞宝章が叙勲されました。

加藤先生は赤道大気のフィールド研究に大いなる志を抱かれ、MUレーダーの完成直後にインドネシアでの大型大気レーダー建設に向けた現地調査を開始されました。1990年代に東西4,000kmに広がるインドネシアの各所を訪問され、最終的に西スマトラに候補地が選定されました。その後、2001年に（故）深尾昌一郎京都大学名誉教授を中心にEAR（赤道大気レーダー）が建設されました。密林の中を駆け巡る調査隊の先頭を歩まれた加藤先生の姿を今も鮮明に思い出します。困難な場面でも、いつもの柔和な笑顔とウィットで我々を励まされ、進むべき道を指し示されました。これからも我々後進を天国から温かくお見守りください。衷心よりご冥福をお祈りいたします。

（情報・システム研究機構 津田敏隆）